(二) 鶴のいきぎも

そんなことがあつてから数年後、善知の母は病気にかかり床に臥す身となつた。孝行者の善知のことだから、薬などを求めていろいろ手を尽してはみたが、一向に効めはなくあといくばくももたないと思われた頃、老母は静かに目をひらいて善知にいうには、「今夢枕に、白髪白髯の老人があらわれて、つるの生ぎもを喰うと病気は平癒し長寿をまつとうするであろうという間もあらせず煙の如く消え去つた」と、それを聞いた善知は、不思議なことよと思つたが、「母上しばらくそれで母の病が癒るならこんな易ぎことはないと、まつてください、必ず鶴の生ぎもとやらを求めて来ます」と用意もそこそこ家を出た。

道を北に求めて急いで行くと、道の傍から人のうめくような声がするので、のぞいてみると、容顔美しく雪かと思う程の白き肌に美しい衣裳をまとつた二十ばかりと思われる乙女が、松の樹の下によこたわつていた。善知は近づき静かに仔細を尋ねると、乙女は京なる都より故郷なる陸奥に下る途中、小疵を病み道行く人に、この地の薬湯がよく効くとのことで来てみたが病は容易に癒えぬばかりか貯えの食物さえ尽きもう餓死するばかりと、さめざめと涙を流してうちなげく。慈悲深い善知はいたく同情し、私は山に住む賤しきもの故、このようなものより喰つていない、都に住む貴女の口にはとうていあわないとは思うがと、背にした粟飯を与えた。乙女は喜び食べ終り、私はみらるる通りの旅人にてこの恩に報いようにも報ゆることが出きないから、私を供として使つて欲しいという。善知はあわてて、私は山に住む者、妻さえおらぬになんで貴女のような美しい女を供になどとてもできぬといえば、乙女は妻がおらぬならなおのこと私を召使つて下さいという。善知がいくらなだめても聞き入れず、女はただ泣くばかり、今は全くもてあました善知は、母の病を語り一刻もちゅうちょできぬと、乙女を振り切つてかけだせば乙女も善知の後をしたつて急ぐ。

やがて善知はほどなく大きな川辺にでた、川はちょうど洪水にして流れは矢の如く、橋も舟もなく右よ左よとただかけめぐり全くとほうにくれた。母のこと、乙女のこと、善知の頭の中はあせりでいつぱいだつた。しばらくして、ふと川向いを見ると、老母の夢に現われたような白髪白髯の老人が岩に腰かけ、濁流に釣糸をたれている。善知は大声をあげ、「御老人、御老人、我れ母のため是非この川を渡らねばならぬが、橋なし、舟なし御老人いかがして渡したまえ」とたのんだ。老人は深くうなずき手にした釣竿をはつしと川へ投げ入れたかと思うと、忽ち一そうの小舟となり、老人は身軽くとび乗り濁流をよぎつて善知の待つている岸へ横づけになつた。善知はよろこび舟に乗り岸をはなれんとするところへ、乙女がとぶようにかけて来て共に乗らんとする。老人この時早くも手にした竿にて岸をつき舟をさつと出した。乙女は、「舟を戻してわれをのせたまえ」と続けて叫けべば、老人は乙女をにらみ、「汝は女性なり、舟は陰なり、女は陰なり、舟も陰なり水また陰なり川陰なり、また北風吹いてこれまた陰なり、陰長ずるときは陽を尅す、これ凶相なり、汝その場より早よ立ちのけよ」と大いに叱る。乙女は何を思つたか、上に着ていた衣をぬぎ、「われの形見としてお受け下され」と善知めがけて投げつけた。衣はねらいたがらず善知の背にあたりはしたが、おりからの吹きつのつた北風に吹きあげられ、あれよあれよという間に、ひらり、ひらりと空にまいあがつた。岸辺の乙女は、「善知さま、あの衣のとどまるところに、御身の尋ね求める鶴あり、早く行きて求めよ」という。善知は老人に礼もそこそこ、衣のあとを追つてかけだした。〈善知が老人の力で川を越えたところを舟越しといい、乙女が衣を投げつけたところから投付の川ともいう。乙女が小瘡をなおすために入つた湯を、神乙女（カントメ）の湯といつている。荒川地区より峯吉川地区にかけて断層があり、この断層にそつて鉱泉が多く発見されている。主なものとして、湯の沢鉱泉、日暮鉱泉、桜鉱泉などがある。〉

衣は風のまにまにあるいは高く、あるいは低くとび、善知はそれを追つて走り続けた。相当長い時間走り続け、息もきれぎれになつた頃、善知はいつしか深山幽谷に入つていた。今は走る気力もなくなり棒のようになつた足をひきひき奥へ奥へとあるいていつた。それからいくら位たつたのだろうか、善知がふと眼をさますと、大きな切株のもとにたおれていた。だんだん意識がはつきりするにつれ背の方で水音がするので頭をもたげてみると、すぐそばに大きな渕があり渕の真中に一つの島があつた。島には低く枝をたれさげた老松が四、五本生え、その影は渕の水に写り、高い木々の梢をもれてくる陽に輝く渕の水はあくまでも澄み、まるで、別天地のようだつた。なおもよくみると老松のひときわ高い枝に乙女の衣がかかり、松と松との間には名も知らぬ大きな鳥が二〜三羽楽しげに歩きまわつていた。

善知はさてはこれが求める「つる」かと思うと、疲れも忘れて立ちあがつた。だが島にゆくにも橋もなく舟もない、それに流れも早く全く途方にくれていると、このとき一陣の風とともに大鷲がまいおり、するどい爪でつるをおさえてとびたたんとす、この騒ぎで他のつるはとび去りいま鷲がとりおさえた一羽より残つていない、善知は大声をあげ、「やよつるを返したまえ、かえしたまえ」と、叫ぶ。鷲は思わぬ人声に驚き鶴をかかえたまま大きくはばたき空高く舞上つた。善知は今度は鷲のあとを追い、「つるを返せ、つるを返せ」と叫び数丁も追い続けた。大鷲はあわれに思つたのか、つるをはなして消え去つた。つるは傷つきながらも善知をめがけて嬉しそうに舞い降りて来た。善知はかげよりいたわりながらよく見ると、それは数年前、父が健在だつた頃助けてやつた鳥であつた。

話は数年前にさかのぼるが、ある日父母とともに開墾した畑の手入れをしていると、はげしい羽音とともに、名も知らぬ鳥が、片羽と片脚を折つておりてきて、善知のそばのやぶに入り、助けてくれといわぬばかりに頭をさげる。その姿のあわれさに、善知は刈草などをかき集め急いで鳥をかくし、仕事を続けていると、数人の武士がかけて来て、「この辺に大きい鳥が落ちた筈だ、かくしては身のためにならぬぞ」と言葉あらあらしく尋ねる。善知はそのような鳥はみかけぬと、言葉ていねいに答えると、さてはあの山蔭ならんと急ぎ去つた。善知はその鳥を家にいただいて帰り、傷の治るまでめんどうを見て放してやつたことがあつた。

さては、あのときの鳥が「つる」という鳥であつたのか、つるは千年もの長寿と聞くが、あのときの恩返しに、千年の命を縮めて老母の命を救つてくれるのかと、善知は泣き泣きつるを抱いて、疲れた足をひきひき家をさして帰つた。

一方家にのこされた母は、息子のことを心配しているうちに、いつしか深い睡りに入つた。すると夢に年の頃十八、九かと思われる美しい乙女が現われ、「これは、つるの生きぎもというもの、はよたべなされ」といつて、小さくさいては老母の口に入れてくれる。老母は余りにも美味なので「うまい、うまい」と声をあげてほめたかと思うと、夢はさめてしまつた。だが不思議なことに病気は全快していた。そこへ、声をくもらせながら善知が帰つて、いままでのありさまを伝えた。母は母で夢のことをかたり、二人は抱きあつて病気の全快したことを喜びあつた。かかえてきたつるの傷は重くあやうく思われたので、老母と同じ床に休ませ介抱し、親子は口をそろえてつるの生ぎもをたべさせてくれたのは、あなたの化身でしたかと尋ねると、つるは深くうなずいて眠るが如く息たえた。親子はつるのなきがらを抱いて歎き悲しんだ。

ちょうどそこへ村人が来て、つるは珍鳥であるから秘かにしておくことはできないというので、善知は郡司のもとにゆき、ことこまかに今までのことを語つた。郡司は余りの不思議なことに感激し、沢山の賞をくだされたという。